

嘗ての住人

鳥沼 憂

「鈴木麻紀様」

ドアノブに掛かっていた宅配の袋を確認して、私はま  
ずひどく落胆した。楽しみにしていた荷物がようやく届  
いたのかと思ったのに、宛名が「山口梨佳」、つまり私  
の名前ではなかったからだ。

一呼吸置いてようやく、これをどうしたものか、と悩  
むところまで頭が回りだした。この賃貸アパートに引ッ  
越してきたのは二週間前。女性の一人暮らしは下手にご  
近所挨拶をしないほうが良い、という大学時代の友人か  
らのアドバイスを真に受けたおかげで、アパート内に住  
んでいる人間の誰一人として顔も名前も知らなかった。  
とりあえずパンプスとスーツを脱ぎたくて、それを持  
って部屋に入り、直後に後悔した。家に持ち込んだ時点  
で、私にはこれをおこなう責任が生まれてしまった。  
素知らぬ顔でアパートの入口部分にでも置いておけば、  
本人かもしくは大家が然るべき処分をしてくれたかもし  
れないのに。

幸いなのは、この荷物がさほど重要なものではなさそ  
うなことだった。宅配会社からの DM だと書かれてい  
るので、最悪こちらで捨ててしまっても大丈夫だろう：  
…と、邪な考えが浮かぶ。

ひとまず風呂を沸かそう、と私は一旦それを床に置き、  
頭の片隅へと追いやった。

後で調べたところ、誤配達された荷物は受け取った者  
が郵便局に持っていくなどして、本人に送り届ける責務  
があるらしい。面倒なことになってしまった。

とりあえず、大家に確認するのが一番手っ取り早いだ  
ろうか。明日の昼休みにでも電話で聞いてみようと思  
い、私はその見覚えがあるようなないような名前を、スマホ  
のメモ帳に記した。

ところで、最近悩んでいることが一つある。ここ最近、  
夜中になると犬の唸り声のような音が聞こえてくるのだ。  
近所に犬を飼っている家があるのかと思っただ、日中  
はほぼ聞こえてこないうえ、近くに少なくとも外飼いを  
しているような犬はいなかった。床下からガタガタと音  
がすることもあるし、風の吹き抜ける音が聞こえやすい  
構造なのだろうか。

出張の多い仕事だから、という人事の言葉を盲信し、  
家にいることも少ないだろうと家賃に釣られて木造アパ

トの一階を選んだことを、入居一週間目でほんのりと後悔した。虫は比較的平気なタチだし、ある程度の不備は受け入れるつもりだったが、音の問題は完全に想定外だった。不気味なものもそうだし、どことなく不安を煽られる。

以前、親友の由実ゆみにこのことを話したら、「梨佳りか、それ絶対『心霊物件』だって！」と騒がれたので、迂闊に相談もできなくなった。……人が真剣に悩んでいる問題をオカルト話で片付けるな、と言いたくなつたし、大事おおじとにされるのが一番困るからだ。ミーハーで噂好きな彼女がどこぞで言いふらさないよう、よく言い聞かせてはお願いが。

気を紛らわすためにイヤホンを着け、好きな音楽を流しながら家事をこなす。家事は好きだ。脳を使うことから開放され、無心になれる。料理も、食べるより作るほうが好きなくらいだ。なぜなら、

「……んー、これはさすがに食べられないか。勿体ないけど」

元々少食だったのが、一人暮らしを始めて余計に食が細くなつた。そのせいで、せっかくおかずを作っても、自分ひとりでは処理しきれずに捨ててしまうことがままあつたからだ。

ほとんどレシピ本やサイトを見ながら作るのに味には困らないが、一人で食べられる分量を計算して作るの、なかなか難しい。栄養バランスを考えてもう一品、と作ったおかずが、大抵一日では食べきれない量になってしまふし、一人暮らしで体調を崩すわけにもいかないので、少しでも不味いかもと思つたらすぐ捨てるようにしている。勿体ないとは思うが、背に腹は代えられない。

「一人暮らしって大変だな。誰にも自分の残りを食べてもらえないし」

実家では食べ盛りのきょうだいや、最悪、ペットの犬に食べきれない分をあげて、自分の小食さを誤魔化していた。一人の寂しさはさほど苦にはならないが、一人の不便さは何とかならないものか、と思っている。

「残飯処理」の偉大さに思いを馳せながら、やるべきことを終わらせた私は床についた。イヤホンを着けたままでは朝のアラームが聞こえないので、寝るときは仕方なく外している。例の音は耳障りだが、何故だか深夜零時を回るころには止みだすので、最近はその時間を目安に眠れるよう、家事の時間を調節している。

この件についても大家に相談できれば楽なのだが、変にクレームをつける借主だと思われたくないので、悩ましいところである。

\*

「鈴木麻紀さん宛ての荷物が、ですか」

会社の昼休み、電話で鈴木麻紀という人物について尋ねると、大家はこちらを疑<sup>うたぐ</sup>るかのような口調で言った。

「はい、昨晚私の部屋に届いていて。他の部屋の方でしたら届けておくので、教えていただけませんか」

そう答えると、大家は困ったように「あー」とか「えー」とか、明らかに答えを渋るような素振りを見せてから、ようやく口を割った。

「いや、配達ミスではないんですよ」

「……はい？」

私は鈴木麻紀ではないのだから、ミスではないというのはおかしいだろう。仮に彼女が「私の前に、私の部屋に住んでいた」人物だったとしても、住所変更はしているはずなのだから、私に届くのは配達側のミスとしか思えない。

……と反論しようとしたところ、大家はさらに言いづらいことのように、声の調子を落として話し出した。

「……実は、鈴木麻紀という人物は、失踪したんです」

えっ、と間の抜けた声が、口を突いて出た。ニュースの中でしか聞いたことのないワードに、自分の耳を疑う。「山口様と同じ、一〇一号室にご入居されていたのですが、家賃の滞納が数ヶ月続いております。ご連絡して

も返答がないので、やむを得ず部屋へ入らせていただいたのですが、もぬけの殻でした」

話によると、警察にも捜索願は出してあったらしいのだが、あまり長く部屋を空けたままにしているのも賃貸業に影響があるため、やむなく彼女との契約は解除され、空き物件として募集を出したのだという。

「荷物は一応、こちらで預かっておきます。まあ、戻されることはないと思いますが……」

大家はさして感傷的になる様子もなく、事務的にそう言っただけだ。赤の他人とはいえ、ほんの少し同情心が湧く。

札を言っただけで電話を切った後も、「失踪」の二文字がしばらく脳裏に焼き付いていた。遠い異世界の言語だと思っていたものが、急にひどく身近にやって来たような気がして、目眩がするようだった。

とはいえ、これで私の役目は終わり、一件落着だろう。明日からは素知らぬフリをして、また平穩に過ごせばいい。かつての住人に何があったかなんて、私には関係のないことなのだから。

家にまだ二日分が残った大根のサラダを胃に掻き込み、気持ちを切り替えるため、少し早く自分のデスクへと戻った。

やや早く仕事が終わったおかげで、いつもより少しだけ早く帰宅することができた。一年目でまだ割り振られている仕事が少ないのはあるだろうが、休憩時間の返上も悪いことばかりではないな、と気分良く歩いていた。

だが、家が見え始めたあたりで、私は異様な雰囲気を感じ取って足を止めた。狭い道路に、木造のボロアパートには不釣り合いな黒塗りの車が一台、道を塞ぐように停まっていた。

心当たりはなかったが、とっさに塀と塀の間に身を潜め、そつと様子を窺う。背伸びをして覗き込むと、背の高いスーツ姿の男性が二人、部屋の前に立っているのが見えた。

さらに目を凝らし、私は思わず声を上げそうになった。彼らが立っていたのは、一〇一——私の住む部屋の前だったからだ。何度もインターホンを鳴らし、怒鳴っているというほどでもないが、きつめの口調で話しながらドアを叩いているのも目に入った。

前述の通り私に心当たりは全くなかったのだが、見つかったら殺される、という本能的な恐怖が私の頭を支配した。口を両手で覆い隠し、息ひとつ吸うのにも異常なほど神経を尖らせながら、この嵐が通り過ぎるのを待った。

幸いにも、五分ほどで男たちはアパートの前を去り、車に乗り込んで行ってしまった。五分、というのは後に

帰宅してから割り出した時間であり、体感は三十分にも一時間にも感じられたし、男たちが去った後もしばらくは足が動かなかった。

今日はそのままで暑くなかったはずなのに、シャツはいつの間にか汗だくになっていた。色々あつて疲れたので、今日は早く風呂に入って、さっさと寝てしまおう。

\*

結局、いつも寝る時間より一時間以上早く、布団に潜るようになってしまった。当然のことながら食欲もあまりなく、いつも以上に箸が進まなかった。大根サラダは、明日食べきれなければまた廃棄コースだな、と申し訳なく思った。

そして、この時間に寝付くということとは、「あれ」を耳元で聞くということだと、今日はこの時まですっかり忘れていた。

『……………ウウ』

ある程度聞き慣れたと思っていたそれは、何故か今日是一段とはつきり、大きく聞こえた気がした。犬の唸り声というよりは、人間の呻き声のように。

大きく飛び上がりそうになった心臓を撫でつけ、落ち着かせる。これはただの風の音。断じて心霊めいた何かではない。

『……………ケテ』

「——は」

嫌な妄想が膨らんで、あらぬ幻聴を引き起こしたのかと、私は顔をしかめた。しかし、

『……………タス……………ケテ』

『……………ケテ。タスケケテ。タスケケテ。タスケケテタスケケテタスケケテタスケケテタスケケテ』

「……………何を、言って」

いや、言っているだけではない。床の下から、ドンドンドンドン、と板を叩くような鈍い音が響いている。しかも音も声も、次第に激しさを増していき、しまいには部屋全体がカタカタと揺れはじめた。

「——いや」

幻聴や幻覚で片付けるには、あまりに実害が大きかった。このままでは命に関わる——そう直感した私は、意を決してとあるスペースへ手を伸ばした。

床下収納。

大家から家の説明を受けたとき、「ここは床下収納なのですが、床下の土が腐食しているため、開けないでください」と言われていた。

だが、なんとなく異音の出所はここではないかと、薄々感じていたのだ。開けたところで腐った土しかないなら、確かめる必要もないと思っていたのだが。

嚴重に貼られたテープを剥がし、半ばヤケクソめいた気持ちで、収納の取っ手を思いっきり引いた。土埃が巻き上がり、中が露わになる。

『ヤ、ツト、キツイテ、クレタ』

黒ずんだ土の中には、胸から下が埋まった状態の、酷く汚れた若い女性がいた。

その煤けた顔オチでも、私の脳裏に刻まれた記憶を刺激するのには十分すぎるほどだった。

\*

「お人形のリカちゃんには、これで十分よね」

何をきっかけにして、私が彼女らの標的になったのかははっきりしていない。ただ、私たちが小学生だった当時、クラス的女子内でリーダー的存在だった彼女——鈴木麻紀にとつて、私はいけ好かない女子だったのだろう。口数が少なく感情表現も薄かった私は、彼女らから「リカちゃん人形」というあだ名をつけられ、しばしば侮辱的な仕打ちを受けた。

その日は教師の目を盗み、給食のおかずを全てスープの中にぶち込まれ、ぐちゃぐちゃになった汚い雑炊のようなものを食べさせられた。

「知らない」

「は？ せっかくあたしが作ってあげたのに？」

苦い顔をして抵抗しても、無駄だった。彼女の力は私よりも強く、無理やり口にスプーンを突っ込まれた。金属部が喉に接触しかけ、えずいてトレイの上に雑炊をぶちまけると、彼女は私を侮蔑するような目で見た。

「ちよつとり力、汚いんですけど。残さず食べなきゃダメでしょ」

そう言つて、彼女は私が吐いたものを再び掬い、口の前まで持つてくる。何の計算もされていない、ただ無雑作に混じり合つただけの食材たちは、味も食感も最悪というほかなかった。

「言つとくけど、先生にチクろうなんて思わないでね」

彼女は目を吊り上げ、私を睨みつけて言った。それから嫌に口だけで笑い、言い放つた。

「食べさせてもらえるだけ、感謝しないとね？」

\*

「ただいま」

部屋の電気を付け、スーツを脱ぎ捨てる。部屋着に着替えた後、冷蔵庫の中を確認し、おかずを作つて米を炊き、その間に風呂へ入る。

炊き上がった米とレンジで温めたおかずを食卓に並べ、いただきます、と独りごちる。あの頃に比べれば段々と食べられるようにはなつたが、食事はまだ、少し苦手だ。

「そういえば、大根サラダはもうまずそうかな」

冷蔵庫で保管したとしても、手作りの料理はあまり日にちを置きたくない。三日経つたら、見た目が悪くなくても捨てるようにしている。

食材を捨てるときは、ついでに冷蔵庫の中身も確認する。賞味期限の確認や、野菜などは傷んでいないかどうか、よく確かめる。

「あつ、もやしを使うの忘れてたな。意外と日持ちしないんだよね」

「このほうれん草も、ちよつと傷んでるかな」

「あー、牛乳も賞味期限切れてる。残り少ないけど、ちよつと怖いもんね」

弾いた食材は、大根サラダの器に一緒くたにして、ささと掻き混ぜる。そして、私は床下収納の取っ手を引いた。

『……………ア、ア』

生き埋めにされてまともな理性を失ったのか、今の彼女は呻き声しか上げない。何があつたのかは知らないが見ているこつちが惨めになりそうだ。

そんな彼女に哀れみと軽蔑を込めて、私は大根サラダのボウルを傾け、彼女の頭上へ流した。

『ア、ア、ウア』

死にかけの魚のように口をばくばくさせながら、彼女は体についた食材を舐めたり、口に入れたりしていく。サラダの部分は食いつきが良いが、生のもやしやほうれん草は、一口かじって避けるようになる。

「こら、選り好みしないの」

私は眉尻を下げて微笑み、床に落ちた大きなほうれん草を彼女の口まで持っていく。私が罪悪感なく残飯を処理するために、あまり好き嫌いされては困るのだ。

「食べさせてもらえるだけ、感謝しなよ。ね？」